

石に刻み込むからこそ、 残される記憶

八事霊園が一つのきっかけ

日頃にご先祖様について関心をあまり持っていないくても、お彼岸になるとお墓へ出かけ、手を合わせる人はたくさんいます。真新しい墓碑から長年の間風雨にさらされ、刻まれた文字がほとんど読めなくなっている墓碑もあります。墓石で一番多く見られるのが縦長の長方形をした形式です。ただし庶民でも石で墓碑をつくることのできるようになったのは明治、大正になってからです。それまで一般庶民は、埋葬をした場所に梵語などを書いた木製の卒塔婆を立てる程度のものでした。五輪の塔や宝篋印塔のような立派な墓をつくることのできたのは、大名やその家族など、ごく限られた人でした。

名古屋石製品工業協同組合の前身となる「熱田石匠組合」がつくられたのは大正時代の始め頃のことです。そして大正4年に八事に名古屋市営の共同墓地ができると、この地に多くの石材加工業者が集まり、「八事組合」がつくられました。これが「東南石匠組合」となり、昭和61年に名古屋石製品工業協同組合となりました。



時代と共に変わる墓碑のデザイン

石を刻み、彫り、それらを組み合わせて大小様々な作品をつくりあげていくには高い技術が必要です。仏像、灯籠、狛犬など、墓石以外のものも、注文さえあれば製作します。また石造の納骨堂なども建設します。そのためには土木や建築に関する知識も必要です。墓石のデザインも多様化しています。個性的な墓石を求める人に対し、提案ができるように時代にあったデザインの知識も必要になっています。昔はノミを使ってさまざまな文字や図柄を彫っていましたが、そうした作業も多くが機械化されています。しかし、修正や補修するには昔ながらの技術がなければおこなえないこともあります。組合は主に情報交換を中心に活動をしています。



亡骸を丁重に扱い、埋葬をした場所に目印となるものを置く行為は縄文時代にもあったと言われています。その人が生きた証を後々の時代まで伝えようとする人の心がなくなることはないでしょう。何千年、何万年後まで記録を残すには石が一番優れているといわれています。石工の仕事もなくなることはないはずです。

DATA ■名古屋石製品工業協同組合
所在地:熱田区高蔵町10-1 青木石材店内

- ・大正の初め頃:熱田石匠組合を設立
- ・大正6年:八事組合を設立後、東南石匠組合となる
- ・昭和61年:名古屋石製品工業協同組合を設立